

平成22年11月24日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20820037
 研究課題名(和文) 米国におけるアフリカ系アメリカ人ムスリムの日常実践に関する文化人類学的研究
 研究課題名(英文) Everyday Practice of African-American Muslims: A Cultural Anthropological Approach
 研究代表者
 中村 寛 (NAKAMURA YUTAKA)
 多摩美術大学・造形表現学部・講師
 研究者番号：50512737

研究成果の概要(和文)：本研究は、アメリカ国内の複数の地域におけるムスリムたちに焦点を当て、個々の地域における彼らの語り、日常実践、価値や制度の構築・変容のプロセスを比較し解明するという全体構想のもとに行われる文化人類学的研究である。イスラームの地域性やムスリムの多様性を明らかにするために、ハーレムとデトロイトにおけるアフリカ系アメリカ人ムスリムたちの活動と彼らの地域との関係についての資料や文献、フィールド・データの収集・整理を行った。またフィールドワークや資料・文献収集を進めるなかで、これまで出会った問題群を理論的に取りまとめる作業を行った。

研究成果の概要(英文)：This cultural anthropological study focuses on Muslims in multiple locations in the U.S. and compares their narratives, their everyday practices, and their processes of construction and transformation of the values and institution. In order to clarify the locality of Islam and the diversity of Muslims, this study collects the books and materials, as well as the field data, regarding the African-American Muslims in Detroit and New York. It also theoretically explores the problematic that I have encountered in the course of my fieldwork and material collection.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,330,000	399,000	1,729,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,530,000	759,000	3,289,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：(分科)文化人類学、(細目)文化人類学・民族学

キーワード：文化人類学、イスラーム研究、アフリカ系アメリカ人研究、アメリカ地域研究、エスノグラフィー、都市人類学

1. 研究開始当初の背景

(1) アメリカ国内のムスリムの数は現在 600 万人以上と言われ、イスラームは現在アメリ

カで最も信者を増やしている宗教と言われている。なかでも 600 万人のうちの約 3 分の 1 を占めるとされるアフリカ系アメリカ人ム

スリムは、その数の多さだけでなく、大部分が改宗者であるという事実や、歴史的背景や社会的コンテクストの特殊性、そしてアラブ・ムスリムたちを含めたムスリム移民たちとの差異や共通性といった観点から、アメリカ国内のイスラームを研究対象とする際には無視できない存在となっている。たとえば、山内昌之による『イスラームとアメリカ』(岩波書店, 1995)、ジェーン・スミスによる『アメリカにおけるイスラーム (*Islam in America*)』(Columbia University Press, 1999)、大類久恵による『アメリカの中のイスラーム』(寺子屋新書, 2006)は、いずれも1章以上を割いて、アフリカ系アメリカ人によるイスラームの実践に言及している。また、アフリカ系アメリカ人ムスリムのみに焦点を絞った実証研究としてとりわけ優れているものに、社会学者エリック・リンカーンによる『アメリカにおけるブラック・ムスリム (*Black Muslims in America*, W. B. Eerdsman, 1994[1961])』と、社会学者マティアス・ガーデルによる『イライジャの名において (*In the Name of Elijah: Louis Farrakhan and the Nation of Islam*, Duke University Press, 1996)』の二つがある。だが、両著作ともに、アフリカ系アメリカ人ムスリムによる組織のなかでも特に著名なネイション・オブ・イスラーム(以下 NOI)のみに研究対象を限定しており、NOIのメンバーではない多くのアフリカ系アメリカ人ムスリムの姿はそこには見出せない。さらに、上述の五つのいずれの著作も、アメリカにおけるイスラームの一般的な位置づけ、イスラームの米国内におけるネットワーク、諸々のイスラーム組織の理念や信念とそれらの歴史的・社会的コンテクストを捉え分析する点で優れているが、ムスリムたちとある特定の地域コミュニティとの関係、そして特定の場所における彼らの日常生活は、取り上げられていない。多種多様なアフリカ系アメリカ人ムスリムたちの日常生活と現状、そして彼/彼女らが、どのようにして自らの現状を語るのかを明らかにするには、長期間にわたる参与観察と聞き取り調査が不可欠である。

(2) イスラームと地域コミュニティとの関係を研究する必要性を認識するに至ったのは、1999年の夏にイリノイ州シカゴにあるNOIの本部にて行った短期的な調査の際である。調査を通じて痛感せざるを得なかったのは、特に以下の二点である。①しばしば「ブラック・ムスリム」という名で呼ばれてきたNOIは、たとえば「閉鎖的な」、「秘密結社的な」、「飛び地(enclave)的」、「民族主義的な(nationalistic)」という言葉で形容されることが多く、固く閉じた組織集団だと考えられることが多いが、実際には、それらの言葉から想像されるよりもはるかにゆるやか

に形成されている。また、非メンバーによる支持や協力によって運動が展開されており、メンバー/非メンバーの境界も曖昧である。したがって、集合的に見える現象の内にある多様性(diversity)を見る必要があり、組織や団体としてNOIを研究するよりは、ひとつの社会運動として捉えたほうが、そのダイナミズムをうまく表現できる。②メンバーである人たちも、単一の目的と動機を持って、一様に運動に参加しているわけではない。したがって、諸個人の間には存在する差異を見る必要があると同時に、諸個人の内にある差異をも見る必要がある。

(3) 以上のような知見から、アメリカでのイスラーム運動をより具体的に、日常生活の中で捉えるためには、何よりもまずイスラーム運動とそれが展開される地域コミュニティとの関係を見る必要があることに気付いた。そのためには、彼らの日常生活への参与観察が不可欠であり、それゆえに、2002年11月から2004年10月にかけての約2年間、ニューヨークのハーレムで、イスラームとハーレムとの関係を解き明かすためにフィールドワークを行った。その成果をまとめた博士論文では、NOIだけでなく特定の団体に所属しないアフリカ系アメリカ人ムスリムに焦点を当て、ハーレムが1990年代から現在にいたるまで「再開発」という名のもとに大きな変化の波にさらされ、同時に多くのアフリカ系移民(その多くがムスリム)がハーレムに居住し始めるなかで、彼らがどのようにしてニューカマーのムスリム移民たちとの差異化をはかりながらも、何とか衝突を避け、共生の道を模索しているのかを明らかにした。(4) 本研究は、これらの成果をさらに発展させていくもので、比較の対象を設定するために、ハーレム以外の地域にフィールドを広げ、そこでムスリムたちがどのような組織や制度と結びつきながら、どのような生活を営み、どのようにして「他者」および「自己」を語るのかを明らかにするものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、アメリカ国内の複数の地域におけるムスリムたちに焦点を当て、個々の地域における彼らの語り、日常実践、価値や制度の構築・変容のプロセスを比較し解明するという全体構想のもとに行われる文化人類学的研究である。博士課程在籍中に行ってきたニューヨーク・ハーレム地区のアフリカ系アメリカ人ムスリムに関する民族誌的研究の成果を踏まえた上で、ハーレムだけでなく、その他の地域(当面はニューヨーク、デトロイト、シカゴ等のアメリカ国内の都市)におけるアフリカ系アメリカ人ムスリムたちの日常生活を描写し、分析することで、イスラームの地域性やムスリムの多様性を明

らかにするのが本研究の目的である。とりわけ「アメリカ同時多発テロ事件（9・11）」以降、アメリカとイスラームとの関係について多くの言説が飛び交うなかで、アメリカ国内に暮らすムスリムの日常実践に関する民族誌的研究は、焦眉の課題だと考える。

(2) 研究期間である2年間のうちに、ニューヨーク、デトロイトの二都市を中心に、各地域のモスクを訪れ、参与観察および聞き取り調査を行い、各モスクのムスリムたちが地域のどのような組織と結びついているのかを明らかにする。その際、比較の見えやすい各モスクのイマームやリーダーたちだけではなく、地域コミュニティにおいて社会活動を展開する「普通の」ムスリムたちにも焦点を当てる。むろん、2年間で行える聞き取り調査の数には物理的に限界がある。それゆえに、とりわけ急務であると思われる、NOIの初期の活動、なかでも1964年のマルコムX脱退までのNOIを直接的・間接的に知る者に特に焦点をあて、彼/彼女らがどのような仕方で自らの現在や過去、イスラームやアメリカを語り、どのような日常を生活しているのかを明らかにする。2年間の本研究の後に、アフリカ系アメリカ人ムスリムの若者たちに焦点を当てた研究を計画しており、その際にはムスリムの世代間における比較も可能になると考える。

(3) 今日のイスラーム運動は、世界規模で起きている宗教運動だとしばしば考えられている。しかし、それらすべての運動を、イスラーム復興運動や反西洋運動といったタームで、単一のグローバルな運動として把握することには無理がある。また、イスラームはしばしばムスリムたちによっても「生の営み方のひとつ (a way of life)」と表現されるように、必ずしも西洋近代に起源を持つ「宗教」という概念によってのみ切り取れるわけではない（「宗教」概念の見直しに関しては、Talal Asad, 1993, *Genealogies of Religion: Discipline and Reasons of Power in Christianity and Islam*, Johns Hopkins University. および Talal Asad, 2003, *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*, Stanford University Press. から多くの影響を受けた。）。それゆえに本研究では、宗教とは何か、あるいはイスラームとは何かとは問わない。本研究の目的は、イスラームと地域コミュニティとの関係・相互作用をできる限り具体的なレベルで探ることにあり、それによってある特定のイスラームの実践が、ある特定の場所と時間の中で、誰によって、どのように展開されているのかを描写し、その実践者たちが人種・民族を異にするムスリムや非ムスリムとどのような関係を築いているのかを明らかにすることができるだろう。言い換えるならば、

本研究の学術的特色・独創性は、一方で集合的に語られることの多いイスラームが個人においてどのように実践され経験されるのかを、他方で個人のレベルで扱われることの多い性格や傾向性、痛み・苦しみなどの経験等が、どのように社会的に構築され、集合的に現象しているのかを明らかにする点にある。イスラームと地域との関係に可能な限り具体的なレベルで焦点を当てることで、集団と個との結節点を捉えることができると考える。

3. 研究の方法

(1) 本研究の眼目のひとつは、アメリカ国内の地域に暮らすムスリムたちの日常に光を当て、新聞・テレビ報道やムスリム組織の公的声明等からだけでは見えてこない側面を捉える点にある。したがって本研究では、参与観察・聞き取り調査が不可欠かつ最も重要な研究の方法となる。現在に至るまでのハーレムでのフィールドワークによって培われたネットワークを用いて、さらなる聞き取り調査を行い、ニューヨーク内のハーレム以外の地域およびデトロイトにある地元のモスクにおいて参与観察および聞き取り調査を行った。また、それぞれのコミュニティの地元組織や図書館を訪れ、一次資料を収集・整理した。

(2) 研究の方法に関しては、メディア報道や既存の研究による「問題化」を一度括弧に入れた上で徹底して現地での「声」からヨーロッパのトルコ人（ムスリム）移民が抱える「問題」を析出した内藤正典の『アッラーのヨーロッパ——移民とイスラーム復興』（東京大学出版、1996）や、フォーマルなインタビューではなく日常的な「会話」を調査手法のひとつとしてラテンアメリカ社会のダイナミズムに迫った落合一泰の『ラテンアメリカン・エスノグラフィティ』（弘文堂、1988）等から多くを学びながら、参与観察と聞き取りとを調査方法の中心に据えた。これら二つの著作は、研究対象や認識の前提、調査における具体的な方法において異なりが見られるが、フィールドにおいて出会う一見「些細」なことがらをも考察の対象として、ある特定の地域の「文化」のダイナミズムを捉えようとした点で共通している。こうした研究を念頭に、本研究においては、地域に暮らすムスリムたちの「ものの見方 (a way of seeing)」や「存在のあり方 (a way of being)」を捉えるため、彼/彼女たちの語りを聞くだけでなく、フィールドワーク中は可能な限り彼らと行動をともにした。なお、研究の方法という点では、特定の地域の日常生活に密着するという調査手法を用いつつフィールドで出会うミクロな現象とより大きな構造との相関関係を探った、フィリップ・ブルジョアやポー

ル・ストーリーの民族誌からも大きな影響を受けた (cf. Philippe Bourgois, 2003[1996], *In Search of Respect: Selling Crack in El Barrio*, Cambridge University Press., Paul Stoller, 2002, *Money Has No Smell: The Africanization of New York City*, University of Chicago Press.)。

(3) また、長期間のフィールドワークと比べて、調査期間が極めて限られたものにならざるを得ないことを考慮し、次のような工夫をしながら研究を進めた。i)すでにハーレムで関係を築いたムスリムたちに協力を要請し、彼／彼女たちの指示にしたがって、新たな場所でのインフォーマントに出会い、人間関係を築いた。ii)地元モスクのイマームたちやモスクで出会うことのできたムスリムたちに協力を要請し、彼／彼女らの指示にしたがうかたちで、さらなるインフォーマントに出会うという方法を取った。iii)若手映像作家であるサリーム・アジズとシェリー・ウェルドンに研究協力者となってもらい、できる限り映像での記録を残した。とりわけアジズは、彼自身がアフリカ系アメリカ人ムスリムであり、ムスリム・コミュニティ内にすでに多くのネットワークを築いているだけでなく、コミュニティからの信頼も厚いため、彼の協力は不可欠となった。

4. 研究成果

(1) 研究成果の一部を2010年9月の日本アメリカ史学会のシンポジウム「せめぎあう都市空間」において報告した。この報告はいわば、イスラームとハーレムのローカル・コミュニティとの関係を探求するなかで出会った<社会・文化的境界 (socio-cultural boundaries)>という問題に取り組もうとしたものである。「<境界>をめぐる民族誌的素描——ハーレム・コミュニティとコロンビア大学のキャンパス拡大」と題したこの報告においては、ハーレムを構成している複数の境界線を、ハーレム「内部」の多様性という観点からではなく、ハーレムの「外部」との関係で考察した。ここでの「外部」とは具体的には、ハーレムに隣接するコロンビア大学を指している。

事例としては、第一にコロンビア大学によるハーレムへのキャンパス拡大計画をとりあげ、コロンビア大学がどのようにして、この計画を正当化しようと試みるのか、その際に大学が用いる言語やハーレムの表象にはいかなる特徴が見出せるのかを明らかにしようと試みた。いまひとつの事例としては、フィールドワーク中に知り合ったハーレムのムスリム住人の男性とコロンビア大学のキャンパス内を歩いていたときに警備員によって呼び止められるという出来事を扱い、その出来事を通じて浮き彫りになる「異物発

見」のメカニズムとその政治的含意を指摘した。

したがって、報告における第一の課題は、「ハーレム」という場所の特殊性を明らかにするために、「ハーレム」と「非ハーレム」との間に顕在化する複数の境界のあり方を描写し、分析することだった。ひとつの文化、ひとつのコミュニティと呼ばれるものに、輪郭を与えているのがこの境界であって、その意味では、こうした境界線の引かれ方を検討する試みは、文化やコミュニティの構築のされ方にかかわるものである。

第二の理論的な課題は、ハーレムという具体的な場所を取り巻く境界の存在を見ていくことで、境界(線)、差異、差別、卓越、紛争といった一連の言葉によって語られる現象の中にある、複数のレベルのプロセスを明らかにすることだった。私がここで境界の複数性・複雑性を強調するのは、単に複数のカテゴリーによる差異が存在し、それらの複数のカテゴリー間に複数の境界が存在することを主張したいためではない。そうではなく、境界の両端で触れ合い、ぶつかり合っているカテゴリー自体のレベルが複数存在するからである(ロデリック・ローレンスによる「境界の多次元性」への着目が、私のここでの境界の発想に近い。Lawrence, Roderick J. 1996. "The Multidimensional Nature of Boundaries: An Integrative Historical Perspective," in *Setting Boundaries: The Anthropology of Spatial and Social Organization*. Edited by Deborah Pellow. Westport, Conn.: Bergin & Garvey. を参照。)。人種のカテゴリーによって把握された境界が、時には地理的なカテゴリーに置き換わり、また別の時には言語的な差異によって認識される。あるいは、ある時には、そうした境界が、より見えにくく曖昧なものとして扱われやすい、身体の動き、振る舞い、雰囲気といったレベルで顕在化する(たとえば酒井直樹が、「人種」「エスニシティ」「ネイション」といったさまざまなカテゴリーの、横滑りし、重なり合う性質に言及し、分析をほどこしている。酒井直樹, 1996, 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置』新曜社。を参照。)。このように考えていくと、境界は、物理的な場所と場所との間に具体的に存在するものから、空間における語りや振る舞い上の作法といった、より抽象的なレベルで存在あるいは潜在する現象として見ることができる。

コロンビア大学がキャンパス拡大計画のプレゼンテーションの際に用いる写真やイラストおよびそれに付けられたキャプションを検討していくと、ハーレムの現状を写した写真からは人の姿と「自然」が排除され、未来を描いたイラストには「多様な」人々の

姿と「自然」が映し出されていることがわかった。現状を表わした写真には自動車修理工場や倉庫等の近代産業の要素が登場し、未来のイラストには Cyber Café や研究所等のポスト近代産業的な要素が描かれていた。そして大学総長による「建設的」かつ「対話的」手紙を検討していくと、それが誰に宛てられているのかが不明確であることが明らかになってくる。ハーレムの住人に語りかけるような文体でありながら、同時にそれは宛先不明のままに、いわば「良識ある第三者」に向けられていることが明らかになった。

ハーレムのアフリカ系アメリカ人ムスリムの男性とともにコロンビア大学キャンパス内で警備員に呼びとめられた出来事では、その男性が「異物」として「発見」されたことを意味する。そして警備員は、人種や階層、年齢でもない、他の要素によって、この男性を、微妙ではあるが明確に異なる存在として発見した。それは、彼の歩き方や身のこなし方だったかもしれないし、服の着こなし（服そのものではなく）だったかもしれない。彼の目つきだったかもしれないし、彼の話し方だったかもしれない。あるいはそのすべてだったかもしれない。いずれにしても、その際の警備員による線引きは、人種や民族、宗教等の集合的範疇に基づいてではなく、より不明確で、不明瞭な領域——時として「雰囲気 aura」や「匂い」といった言葉で表現されるなにか——において、なされたように見える。当人がどのように後にそのことを振り返るのかという問題とは別に、境界線が一瞬にして引かれたという意味で、この出来事は、警備員自身の「非意識的」（ピエール・ブルデュ）な態度を反映している。と同時にそれは、「発見された」男性にとっても、イライジャ・アンダーソンの言う「コードの切り替え（code switching）」の瞬間であった。彼は、それまでの態度や言葉遣いを改め、一瞬にして「フォーマル」で「制度的」な、よそいきのそれに切り替えたのである。

(2) 2010年の「現代アメリカ社会における暴力と言語を考える」『インパクション』では、タラル・アサド（荻田真司訳）、2008[原著2007]、『自爆テロ』青土社を理論的に念頭に置きつつ前述の境界線の問題を、より直接的に言語と暴力の問題として捉え直し、研究成果の一部を取りまとめようと試みた。直接の事例としたのは、2003年にコロンビア大学のキャンパス内で行われた反戦ティーチインでの出来事である。文化人類学者のニコラス・デ・ジェノヴァ助教授の発言のなかの一節が、翌日になると大々的に報道され、強い非難の声が相次いだ。後に大学総長のリー・ボリンジャーがその件に関して異例の声明を出すのだが、この声明の言語を調べてみると、いくつかの特徴が浮き彫りになった。

第一にこの声明は、デ・ジェノヴァ助教授の発言を非難し、大学のポジションとは相容れないものとして位置づけると同時に、合衆国憲法によって保障される言論の自由に言及することで、彼を解雇せよとする大学内外の声から彼を保護するという、きわめて外交的に巧妙な戦略を用いている。大学は単純にデ・ジェノヴァ助教授を排除するわけではなく、大学の空間内に位置づけ直すのだ。第二にこの声明は、大学においてなにが許容され、なにが許容されないかを社会の成員で確認し、「暴力／非暴力」の境界設定を行うという意味で、ひとつの儀礼として捉えることができる。

この出来事は、一見するとアメリカのムスリム・コミュニティやアフリカ系アメリカ人コミュニティとはなんら関係のない事例に見えるかもしれない。しかし、距離にしてわずか数ブロックしか離れていない教会や集会場やストリートでは許容され、問題視されない発言が、大学内での集まりにおいてなされたときには「事件」として扱われたわけで、その点で、この事例はアメリカ社会における暴力と言語の関係や暴力／非暴力の境界設定を考えるうえできわめて示唆的だった。

(3) 本研究の現地調査としては、2008年8月17日から21日までディアボーン市およびデトロイト市訪れ、フィールドワークを行った。初めての調査地となったディアボーンおよびデトロイトでは、主に地元モスクを訪ね歩き、幅広い情報収集に努めた。とりわけ、ネイション・オブ・イスラームが最初に設立したモスク Masjid Wali Muhammed では地元のムスリムたちから多くの助けを得られ、次の訪問先である Muslim Center のメンバーを紹介してもらえた。Muslim Center はもともと Masjid Wali Muhammed のリーダーシップに賛同しないメンバーによって設立されたが、それでも互いのモスクのメンバーは連絡を取り合っており、連携を保っていることがわかる。Muslim Center でも複数のメンバーから、実に深い歓待を受けた。歴史的にさまざまなかたちでの暴力の対象となってきた地域や組織の諸個人が示す「歓待 hospitality」のあり方を改めて認識し、これをさらに理論的に詳細に検討していくことが今後の課題であることが、明らかになった。

また、2008年8月21日から9月2日まで、2009年1月18日から31日まで、同年8月25日から9月13日まで、2010年2月18日から2月28日までの期間で、ニューヨークにおいてフィールドワークを行った。とりわけ、これまでもフィールドワークを行ってきたニューヨークのハーレム地区のその後の変化をフォローするとともに、上述の(1)および(2)の事例の理論的探求を進めるため、資料を収集・整理し、文献研究をおこな

った。理論的探求を進めるなかで、今後の課題として、社会的・文化的「周縁」あるいは「辺境」と呼ばれ認識されてきた場所や集団において、暴力と文化の関係がきわめて明示的・示唆的なかたちで明らかになること、また同時にそうした場所や集団において暴力や痛みに対する取り組みが多様な仕方になされることわかってきており、今後の課題として、そうした「周縁」において経験される暴力や痛みと、それに対する取り組みを明らかにしていくことが必要である。

また、研究の直接の成果ではないにせよ、ハーレムの地域性を明らかにしていくという課題の一種の副産物として、2010年6月には大月書店より訳書テリー・ウィリアムズ、ウィリアム・コーンブルム著『アップタウン・キッズ——ニューヨーク・ハーレム公営団地とストリート文化』を出版した。この著作はウィリアムズとコーンブルムによる共同研究の成果であり、ハーレムの若者の生活やストリート文化の優れた民族誌であると同時に、10年以上にわたる彼らと若者たちの社会運動的な取り組みの記録でもある。翻訳を通じて、私自身の単独調査では触れ得なかったハーレムの緊密なネットワーク——とりわけ公営団地内のネットワーク——や、若者たちの生活誌的要素に接近することができた。ウィリアムズとコーンブルムとは、今後も共同研究者として協力関係を維持していく。アメリカ地域社会や都市空間の現状に詳しい彼らとの議論が今後の研究に大きく寄与してくれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 中村寛, 2010 (査読無), 「現代アメリカ社会における暴力と言語を考える」『インパクション』5月号: 135-142.

[学会発表] (計1件)

① 中村寛, 2010年, 「<境界>をめぐる民族誌的素描——ハーレム・コミュニティとコロンビア大学のキャンパス拡大」, 日本アメリカ史学会第7回(通算35回)年次大会シンポジウム「せめぎあう都市空間」, 9月19日, 東京女子大学.

[図書] (計1件)

① 中村寛, 2010 (翻訳), テリー・ウィリアムズ、ウィリアム・コーンブルム著『アップタウン・キッズ——ニューヨーク・ハーレム公営団地とストリート文化』大月書店.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 寛 (NAKAMURA YUTAKA)

多摩美術大学・造形表現学部・講師

研究者番号: 50512737